

H28地域協働研究（地域提案型・後期）

RT-01「漆器業関連文化遺産の研究と漆室の3D技術活用に関する取り組み」

課題提案者：八幡平市教育委員会

研究代表者：盛岡短期大学部 三須田善暢

研究チーム員：庄司知恵子（社会福祉学部）、梶ノ木沢拓孝（研究・地域連携室）、林雅秀（山形大学）、高橋正也（東北活性化研究センター）、長谷部弘（東北大学）、王慧子（東北大学）、石沢真貴（秋田大学）、外崎理紗（八幡平市博物館）

<要 旨>

本研究の目的は、散逸の危機にある八幡平市石神地区の旧農家・漆器問屋齋藤家文書を解説・分析するとともに、県内で唯一の漆室（うるしむろ）の3D技術による利活用を試み、漆器業関連文化遺産による地域振興の試みを進展させることにある。史料の散逸を防ぐために撮影した写真から目録を作成・精査しつつ、大福帳その他の文書の解説をすすめていった。くわえて3D技術による漆室の計測をおこないデータで活用できる状態にした。そうした成果を踏まえて、これら漆器業関連文化遺産を地域振興に活用させる契機として、関係者をあつめたシンポジウムを開催した。

1 研究の概要（背景・目的等）

有賀喜左衛門の研究（『南部二戸郡石神村に於ける大家族制度と名子制度』（1939）は社会学・民俗学・社会人類学上高い評価をあたえられているが、その素材である八幡平市石神の齋藤家史料はこれまでほとんど公表されることがなく、一部公表されたものも当該史料が散逸しているといったものが多かった。ところが、地元住民が佐藤源八（＝八幡平市の郷土史『南部二戸郡浅澤郷土史料』（1940）をまとめた郷土史家）の重要性に気がつき顕彰活動の動きが出てきたこと、地元団体の安比塗調査と観光活動、県立大学の調査、および八幡平市博物館の企画展等が起り、齋藤家当家から諸史料寄託の申出を受けるようになった。そうした一連の活動を契機として、県立大学等の研究機関、地元郷土史家、八幡平市博物館との協働により、齋藤家に現在所蔵されている文書の写真撮影と目録整理をおこない、整理・解説・分析を開始した。

特に2015年度、研究シンポジウム『安比塗と文化資源を考える』を開催した際には、これまでの研究内容および現在の漆器業関連文化遺産の抱える諸問題についての地元住民からの関心は強く、研究継続についての期待・ニーズの高いことが判明した。また、単なる史料整理・分析をこえて、いかにブランド化し漆器職人が経済的に自立化できるか、地域内経済の循環に寄与するかといったマーケティングへの期待や、3D技術の活用方法の示唆もシンポジウムにておこなわれた。

そうした研究経緯を踏まえ、2016年度以降は未解明の史料分析を進めるとともに3D技術の利活用を検討することで、漆器業関連文化遺産による地域振興の試みを進展させたいと考えるにいたった。

2 研究の内容（方法・経過等）

調査対象は（1）八幡平市石神集落の齋藤家文書と、（2）同市岩屋集落の小山田家漆室である（写真1、2）。（1）は近世～昭和期の史料（大福帳、附合帳、戸長関係等の村方文書等合計木箱10数箱分）である。（2）は明治の初

めに建てられた漆器の塗り・乾燥等の作業のための漆室である。昔は多くの塗室があったが、家の建て替えなどで壊してしまったため、現在県内には岩屋集落小山田家の1棟しか残っていない。浅沢地区での漆器産業を研究していくうえで大事な文化財であるが、この漆室も老朽化している。

以上の文書を目録作成・写真撮影により、また、小山田家の漆室を3D技術の活用により、デジタルデータへ変換させ、中長期的な保存・管理を可能としてその分析と利活用の検討を行った。

調査方法は、文書解説と3Dデータ計測と実測である。3Dデータ計測にあたっては、専門業者である株式会社TOKU PCMに依頼した。また文書史料の解説にあたっては、一部を郷土史家の工藤利悦氏の助力を仰いだ。

3 これまで得られた研究の成果

（1）齋藤家文書の分析は、現在も続行中のため、中間総括的なまとめとなるが、概ね次のことがわかってきた。①漆器業のみならず、馬産、その他の事業にも齋藤家がかかわっている（表1、写真3）。これは有賀（1939）での齋藤家像とかなり異なる展である。②また、齋藤家は時代状況を睨みながら、集落、地域も踏まえつつ、その時々



写真1 岩屋・小山田家漆室



写真2 漆室内部（画面右は風呂）

の当社が判断をして経営をおこなっている。それゆえ、③名子制度もそのなかでの役割をもっており、永続的なものとは考えられていない。おそらくは名子自身も経営判断をおこなっており、漆器業が下火になると、名子関係を解消していき労働力を木炭製造に移行していった。

項目	単位	
二戸郡荒沢村小作田地ノ所得	円	142.33
但シ田反別	町	4.22
二戸郡荒沢村小作畑地ノ所得	円	61.68
二戸郡浄法寺村小作田地ノ所得	円	41.15
二戸郡浄法寺村小作畑地ノ所得	円	19.35
二戸郡荒沢村貸宅地ノ所得	円	1.24
山林	円	1.71
反別	町	95.46
此収穫金(但薪50軒分)	円	5.00
牛壳ノ所得	円	74.00
二歳牛頭数	頭	8.00
漆器所得	円	11.22
漆器販売	円	172.80
惣黒汁わん	枚	10800.00
木地10800枚		75.60
製漆7貫		70.00
渋柿1石8升		7.56
袋代1320枚		4.05
合計	円	352.67



写真3 馬の種類・所有について（明治5年）



図1 漆室3D図

漆室の内部をデジタルデータで精密にうかがうことが可能となろう。

計測と聞き取り調査その他から明らかになったことは以下のことである。①現在はトタン屋根であるが、建てた当初は茅葺屋根であった。②土台は大工がつくり、土壁は所有者の曾祖父が塗った。③室の大きさは、棟高約280cm、梁行330cm、桁行300cm、室内天井の高さ150cmである。④室の中に風呂（＝漆器を入れて乾燥させる場所）があり、その大きさは、間口170cm、高さ93cm、奥行73cmである。風呂内部は2段で、楔止めの構造になっている。⑤室の土間に松の木の板が直に張られていたが、その理由は、湿気を得るためであると思われる（適度な湿気が漆の乾燥に必要なため）。⑥室に使用している木材は、杉・松・栗・樺

であった。⑧これは別調査で分かっていたことでもあるが、非常に珍しい蒔絵筆の片切筆（長刀筆）がこの室内部から発見されている（写真4）。今回もそれを確認した。



図2 漆室内部3D図

以上の成果報告会として2017年9月にシンポジウム『3D技術と漆器文化：岩手に現存する最後の漆室～最新技術で保存する岩屋小山田家漆室～』を開催した。



写真4 蒔絵筆（上から3本目が片切筆）

4 今後の具体的な展開

史料分析は現在も継続中のため、今後精査をすすめることで、上記以外多くの論点が出て来ると考えられ、それにより、既存の大屋一名子関係とは異なった像が描けよう。そのことは地方名望家像の再検討にもつながる仕事となる。

また、デジタル写真化・3Dデータ化によって、現物（史料・建物）が失われたとしてもデータの半永久的な保存・管理が可能となることから、今後多くの研究者の分析に資することになり、博物館等での展示への活用も広がる。

だが、県内で1棟（おそらくは東北地方でも1棟）となった漆室は、可能であればやはり現物を修復保存する途を模索するべきではないかと考える。そのことは、浄法寺漆器のブランディングを考えていく際にも、有益となろう。それは、歴史的な文書史料と文化財の施設をセットで保存・利活用し、文化遺産として位置づけていくことが、今後必要になると考えるからである。

5 その他（参考文献・謝辞等）

写真1、2、4は高橋勇介氏撮影、図1、2はTOKU PCM提供である。ご協力いただいた各位に感謝申し上げます。

有賀喜左衛門、1939、『南部二戸郡石神村に於ける大家族制度と名子制度』アチックミュージアム。  
佐藤源八、1940、『南部二戸郡浅沢郷土史料』アチックミュージアム。